

弘化3年本郷丸山町火災

弘化3年(1846)1月15日午後2時、北風激しく吹き荒れる中、江戸小石川片町の北、武家屋敷から出火した火事は、丸山へ延焼し、本妙寺菊坂の辺りより本郷御弓町へと燃え進み、これより元町、本郷通り、湯島通り、春木町の辺り、神田明神門前(湯島聖堂は加賀藩の活躍により無事)、旅籠町、仲町へ進んだ。

一方、湯島の火は、駿河台から小川町へと延焼し、東西神田の町々を焼き尽くし、さらに本町から石町、室町、大伝馬町、小田原町、小船町、堀江町、小網町、茅場町、八丁堀、浜町、永代橋まで、そして、霊巖島、鉄砲洲佃島(本願寺までは焼けず)、南八丁堀までを焼き払った。西は御堀端通り、神田より一石橋まで、日本橋の向かいは通り一丁目壱町まで、京橋の手前一円が焼失し、翌16日の昼12時過ぎ炭町の竹河岸で焼け止まった。この火災によって、長さ1里30町、幅約10町の地域、町にして380余町が焼土と化し、29軒の大名屋敷、913軒の旗本屋敷、5軒の寺院、2軒の神社、19,650軒の町家が焼失した。また、焼け落ちた橋は20、焼死者は300余人、56,000戸の人が焼け出された。

16日には、筋違橋御門外(佐久間町)、松屋橋川岸通り(八丁堀)、江戸橋広小路(四日市)の3か所

に間口6間、奥行54間の「救小屋」が作られ、とりあえず一人3合の割合で炊き出しが始められた。この救護活動は2か月後の3月10日まで続けられ、この間に延20万人の被災者に600石の白米が支給された。

また、家を失った人で、一人暮らしの人には、白米5升、銭200文、二人以上の世帯には、4歳から人数に応じて白米3升、銭200文が支給され、最終的には2,300石の白米と2,300両の銭が提供された。

救小屋には野宿者が収容され、負傷者に対する手当ては、この小屋で町医者が中心になって行った。

この本郷丸山町の火災は、焼失規模が大きい割にはあまり知られていないが、この火災とよく似た火災で有名な火災として、明暦3年(1657)1月18日の振袖火事、元和2年(1682)12月28日のお七火事、享保2年(1717)1月22日小石川馬場の火事があり、いずれも冬季の火災で、しかも出火場所が江戸城の北側という点が共通している。

この翌年弘化4年3月24日には、8,000人以上の死者を出した善光寺地震が発生している。

御大名様方御紋ハ
 御上屋鋪
 □印御中屋鋪
 無印御下屋鋪

赤印焼	橋	黒焼
白印	白	川
八	吉	



少門大路二番



